偉人パラダイス

野球人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
偉人パラダイス

【Ｎコード】
Ｎ３３０１Ｚ

【作者名】
野球人

【あらすじ】
俺、杉下勇人（すぎした・ゆうと）は高校１年。いろいろな理由が重なり織田の先祖と同居している。親もいなければそこまで特別に親しい友人もいない。
次々に現れる歴史的有名人の子孫を相手にするのは予想以上に辛かった・・・。

『先祖』

君たちは昔の偉人たちを知っているだろうか？この人たちがいなければ今のこの世はないだろう。
俺の名前は杉下勇人（すぎしたゆうと）、偉人の話をしているが別に俺の先祖が偉人というわけではない。
「ちょっとー！勇人まだ～？」
「少し待てよ・・・」
こいつの話をするためにこの話をした。こいつは織田美長（おだ・みなが）少々めずらしい名前だがこれは歴史的有名人、織田信長の子孫で信長から1文字とったらしい。
「遅いなー！学校に遅れるじゃない！」
「悪い悪い・・・」
「帰りに何かおごりなさいよ！」
「なんでそうなる・・・」
信長の性格を受け継いでいるのかけっこうせっかちだ・・・。しかしホントに時間がギリギリだ。
「急ぐか、遅刻する」
「だから最初からそう言ってるじゃない！」
・・・朝からうるせーな

なんとか学校に間に合い、朝のHR（ホームルーム）が終わった。ちなみに俺たちは高校1年、大東（だいとう）高校に通っている。
「今日もギリギリね。ホント進歩なし・・・」
ため息交じりに言ってきたのは豊臣実理（とよとみ・みのり）、織田の次は豊臣だ。さすがに今は昔の家来の関係はないし、親友ぐらいの仲良さだ。
「あっ！実理～！」
「おはよう、美長」

２人の話を聞きつつ俺は帰りになにをおごらされるのか・・・と考えていた。

特に今日は何も無く学校が終わり、いつもどおり美長と家へ向かっていた。ちなみに俺たちは俗に言う
幼馴染というやつだ。
「さすがに少し寒くなってきたね～」
と美長が言い出したので俺も答える。
「そうだなぁ、さすがに１０月、もうすぐ１１月だからな」
そろそろ夏服しまって冬服にしなきゃだな～
「・・・勇人？」
考えていた俺を美長が見ている。っていうかこいつ小さいなぁ～、１５０ｃｍあるか？ぐらいだし。・・・知ってたけど。
「こ、今度は何ジロジロ見てんのよ」
「いや～、美長はやっぱり小さ・・・」
ドガ！
「ぐっ！？」
いきなり俺の腹部に激痛が走った。なにごと！？
「小さくて悪かったわね！」
美長はなぜか怒ってしまった。身長が低いことを気にしてたっけ？
というか身長のこと言ったのになぜ胸を手で覆っているんだ？

まだ痛む腹をかばいつつ帰宅。
「ただいまぁ～」
と俺。
「ただいま～」
と美長。なぜ美長がただいまなのかは、深い、深い、ふか～い事情
があるのだ。で結局俺と美長は
『同居』という形になっている。このことがクラスの連中にバれる
と少々、というか普通にやっかいだ。

この織田、性格はあれだが見た目は・・・まぁ俺が言うのもなんだがすごくかわいい。普通にそこらの雑誌に載っているモデルよりかわいい。小さいからキレイというよりかわいいのがいいと思う。
「ねぇ勇人、今日のご飯何？」
「ん？今日は・・・何がいい？」
まぁ何かはわかってるけど・・・
「グラタンがいいな！」
「はいはい・・・」
やっぱり・・・こいつに聞くと絶対『グラタン』だ。
「早く作ってよ！」
ちなみに家事は全て俺がやっている。さすがにもう高1なので洗濯物ぐらいは自分でやってほしいんだが・・・
もう一つ。美長の家事スキルは0に等しい。前にゆで卵を作らせたら電子レンジが大爆発を起こした。
なぜレンジなのかは予想がつくだろう・・・

俺がグラタンを作っている間、美長はと言うと・・・自由そのものだ。好きなTVを見たり、ゲームをしたりと遊んでいる。まぁそっちのほうが静かでいいんだけどな。
そろそろできるから食器などを美長に用意してもらおう。
「お～い美長、そろそろできるから準備して・・・？」
「スースー・・・」
美長のやつ寝てるし・・・。こいつ寝てるとホント美少女だなぁ。・・・何も言わなかったらだけど。
などと考えていたら・・・
「ん～、ふぁ～」
かわいいあくびと共に美長が起きた。そして俺の顔を見ている。
「・・・何よ」
急にしゃべられたので俺はびっくりして・・・
「い、いやなにも・・・じゃなくて！夕食できたぞ？」

しかしずっと一緒に住んでたからあんまりわからなかったけど、最近美長って急に女っぽくなったよな・・・
胸のほうはまだまだだけど・・・
「ふっ！」
「ぐはっ！」
いきなり溜め０のフックを俺に決めてきた。なんだ！？
「な、なんだよ・・・」
「いやらしい目でどこ見てんのよ・・・？」
少し顔を赤らめてこっちを見ている。俺ってそんなにいやらしい目をしてますかね？
「どこも見てねーよ！それより早く食卓につけ」
「うん」
はぁ～、さっさと食べよ・・・

食べてる間、美長と今日あったこと・・・と言ってもほとんど同じ行動しかしていないのでテキトーな世間話をしていた。
「それでね～、実理がね・・・」
俺が作ってやったグラタンを食べながら学校で聞いたウワサ話をしている美長。ホント楽しそうだな。ここで１つ疑問があるだろう。家事は全て俺がやっていると言ったが親は・・・いない。俺の両親は俺が産まれて５年後に事故で亡くなった。新しい薬品の開発の仕事をやっていたのだが、その研究所がなぞの大爆発を起こした。爆発の原因は今もわからない。なにしろ研究所が全部ふっとんだからな。まぁ今となってはどうでもいいことだ。
「ねぇ、聞いてる勇人？」
「ん？あぁ・・・」
「ちゃんと人の話聞きなさいよね！」
「はいはい・・・」
お前が言うことか？と思うがもちろん口に出さない。またフックをくらいたくないし・・・。

「ごちそうさま～」
「ごちそうさま」
2人して食べ終わったので食器を片付ける。洗うのは・・・もちろんこの俺だ。
「お～い美長、先に風呂入れ」
「は～いよ」
よし。さっさと美長を風呂に入れて俺はゆっくりしよう。女の風呂は長い・・・と言うか美長は長すぎる。1時間以上なんて普通だしな。
「ふ～、少し寝るかな・・・」
ソファで寝転び目を閉じた。

・・・それから何分かたったころに
「うきゃー！」
「！？」
な、なんだ！？美長の声は・・・脱衣所から、か？イヤな思い出しかないがとりあえず行くか・・・
「お、おい！どうしたんだ！？」
脱衣所の扉の前（とうぜん閉まっている）から声をかけると・・・
「ゆ、勇人ー！！」
「！？」
な、なんと裸の美長が飛んできた！なにごと！？
「な、な、なんだよ！」
「む、む、・・・む」
なんだ？『む』？こいつ壊れたか？
「虫！がぁ！いるの！」
あ～、虫か。こいつ大っ嫌いだったな。とその前に・・・
「おい美長、いつまで俺にだきついてんだよ・・・」
「？・・・！」

一瞬考え込むなよ。美長はバッと手を離し、その場にヘナヘナと座り込んでしまった。
「虫ってどこだよ・・・？」
ってか女のシャンプーかなんかの香りがしてイヤなんだが・・・するとコソコソ・・・
「？」
クモ・・・だ。しかもすごく小さい。虫ってこれか？
「・・・」
俺はパタパタとクモを逃がすように窓に追いやって外へ出す。美長はと言うと、座ってボー然としている。
「おい、もう大丈夫だぞ」
「え？・・・あ、うん」
「ってかな、あんな小さいクモなんかで大声出すなよ」
近所迷惑だろうに・・・
「大きさは関係ないでしょ！あんな、む・・・昆虫を私のお風呂に入れないでよ！」
大きさ関係ないならあんなに驚かなくていいし、虫と昆虫を言い分ける必要があったのかと思うし、そもそも俺ん家の風呂だし、とまぁたくさん言いたいことはあるんだが・・・
「美長。いろいろと言いたいことはあるが２つ言う」
「な、なによ」
座ったまま美長はこっちを見上げてくる。しかも少し目が潤んでる。
・・・そんな目でこっち見るな。
「１つ・・・まず服を着るかバスタオルをつけてくれないか？」
「！！」
ガス！　ドン！　ピシャ！
俺が殴られ　壁に激突　美長がドアを閉める音
・・・いってーな。こっちは見ないように必死でお前から目を反らしていたのに。
「あと１つ・・・」

「な、なによ！」
これはこれで大切だから言っておこう。
「クモは昆虫じゃないぞ？」
「今、言うことかぁー！」
バン！とドアを開き、俺に飛び掛ってくる。おい！や、やめろ！
「私はてっきり謝るとか、心配してくれるとか思ってたのにー！！」
な、なんだこいつ！？言ってることが意味不明だ！しかもあわてて着たのかパジャマが・・・すごくきわどい感じになってるぞ！？
「お、おい！美長！」
だ、ダメだこいつ何も聞いてねぇ！今、美長は小さい体を生かして倒れた俺に乗っかって叩いている状態だ。そして暴れているので・・・パ、パジャマが
「美長っ！」
大声で言ってもまだ続けるので・・・仕方が無く俺をを殴る美長の両手首を持ってひっくり返す。結果的に俺と美長はさっきと逆の位置になった。なってしまっていた・・・。
「あっ・・・」
そして今、俺は気付く。俺は美長の手首を押さえつけている。対する美長はもう半泣き、というか泣いてる。一言で言うと俺は美長の上に乗っかって美長を床に押さえつけているのだ・・・。
「あ～、え～とこれはだな・・・」
なんとか弁解しようとする俺。しかし・・・
「し、死ね～！」
見事に右ストレートが決まった。俺には弁解するチャンスも無いんですか？

「くっそ、いてて」
俺は気絶していたらしい。今は深夜の2時。ずっと脱衣所の前で倒れていたのでけっこう寒い。

「ソファで寝るか・・・」
今さら寝室へ行く気にもならないのでソファに向かう、が先客がいた。美長だ。
「はぁ・・・」
ため息をつきつつそばへ向かう。美長は小さく毛布に包まっていた。
そして頭をなでてやると・・・
「ふにゅ～・・・」
こうして見てるとなんか妹みたいだな。こんな凶悪な妹はいないと思うが。そしてそのまま俺もそばに眠った。

『先祖』（後書き）

初めて投稿させていただきました。野球人です。
書くのは予想以上に難しくいろいろと試行錯誤をしました・・・。
しかし読んでくださった皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。
更新は遅いと思いますがよろしくお願いします。

『苦悩の日々』

・・・みなさんこういうシチュエーションはどうだろう？幼馴染の美少女がとなりで寝ていて、起きるなり『おはよ～・・・』とかわいい声で言ってくれる。それは全国の男子が１度は望んだことのあるシチュエーションだろう。・・・しかしその幼馴染で美少女が『ハッ！』とした顔になり、鬼人のごとくボコってきてあげくのはて縄で数時間しばられたら。・・・シチュエーション不成立としか言えないだろう。と言うわけで休日の朝は始まった・・・。

～数時間後～

「というわけで実理たちと遊びに行くことになったの」
「へ～、そうなんですか・・・」
「最初は家だったんだけどさすがにバレたらまずいじゃん？だから変更したの。よかったよね？」
「はい。それはもう・・・」
「やっぱり！さすが私ね！」
「さすがでございます。ところで・・・縄ほどいて」
「ヤダ」
「くっそー！！」
なんで俺がこんな目にあわなきゃなんねーんだよ！・・・理由は実のところわからん。
・朝、俺と美長は２人で目を覚ました。
・美長はソファの上、俺は下で寝ていた。
・・・この２つでなぜこんなにキレてんだこいつは！わけがわからん！
「じゃ、夕方にはもどるからね」
「あ！ちょ・・・縄ほどいて・・・」

ガチャリと、扉が閉まり俺はつるされたまま放置された。

なんとか縄を抜け出せたのは約５時間後・・・
「いや～、あいつがいないと家も平和だなぁ～」
けっこう久しぶりに１人になれた俺は思わず本音を言った。その後はＴＶを見たりＰＣをいじったりと自由に過ごせた。

すると５時もまわった頃・・・１通のメールが届いた。送信者は・・・美長。
『急いでどっかに隠れて！理由は時間がないから後で！』
とのこと・・・。よくわからんが必死さが伝わってくる。ひとまず言われたとおりにしよう、と思い俺は押入れに入った。
その直後・・・
「へ～、美長ん家始めて来たけど・・・。案外フツーね」
と、あきらかに美長とちがうセリフ。この声は・・・み、実理！？
なぜあいつが！？少し戸を開け外を伺う。
「あ、ごめんね美長。いきなり・・・」
「う、ううん。全然いいよ！」
あはは・・・と苦笑いしている美長。なんもよくねーよ。こっちはそのせいで狭くて暗い押入れに入ってるんだからな。
「じゃ、ちょっとお風呂借りるね～」
と言って実理は風呂へ言ったようだ。なぜ人の家で風呂？と思いつつ一回押し入れから出ようとしたら・・・
「み、美長！？」
実理の驚いた叫び。あわてて出しかけた体を押し入れに戻す。
「な、なに！？」
脱衣所での会話を聞くことにした。
「あなたって確か・・・１人暮らしよね？」
「う、うんそうだけど・・・」

あいつ、隠し事とか苦手だから大丈夫かな・・・？
「な、なんで男物の下着があるわけ・・・？」
「！？」
し・・・しまった！洗濯物を干しっぱなしだった！これは最初からやばいぞ！と思っていると・・・
「そ、それは・・・」
なんとかごまかそうとする美長。
「それは・・・？」
それは・・・？
「しゅ、しゅみ、そう！私の趣味！」
「！？！？？」
もう一度言う。美長は隠し事が苦手だ。ってあいつテンパってわけわからんことを言い始めたぞ！？
なんだよ男物の下着を集めるのが趣味な女子って、ありえんだろ。

なんとかさっきのピンチを切り抜けた美長は今だ微妙な顔をしている実理と一緒にリビングへ来た。
しばらくは平和に女子同士でしゃべっていた。するとやはり女子、ガールズトークの定番。恋愛の話をしだした。俺はこういうのは苦手だし、盗み聞きしてるみたいでイヤなのでなるべく聞かないようにした。しばらくそうして押入れの中にいるとなにやら話しのネタでハイテンションになってきた実理がこんなことを言い出した。
「そういえば美長～、あんた身長あんまり伸びないね」
「うん・・・、なんでだろ・・・」
実理も高いほうではないが美長よりは高い。すると・・・
「胸も成長しないね～」
なんて会話だよ
「う、うるさい！私は・・・人より少し成長スピードが遅いのよ！」
またイヤな会話をし出したな・・・と思っていると。
「うりゃ！」

「ひゃわ！」
な、なんといきなり実理が美長の胸をさわりだした！女子同士のコミュニケーションと聞いたことがあったが・・・ホントだったとは（？）
「ちょ、ちょっとやめてよ！」
「いいじゃんか～、女同士なんだし」
いやらしく笑う実理。手つきが女っぽいぞ・・・。と思ってたら後ずさった美長は押入れ（俺の隠れ場所）の方に来た。っていうか、つっこんできた。おい、まさかこれってやばいんじゃ・・・
「ひゃ！」
「美長！？」
グシャっと押入れの扉が壊れ・・・
「・・・勇人？」
「・・・こんばんは」
バレちまったよ・・・

『苦悩の日々』（後書き）

野球人です。更新はとてもバラバラで1日に何回か更新することもあればしばらくしないこともあります。申し訳ありません。
この『偉人パラダイス』はまだまだ続くのでよろしくおねがいします。

『3人で・・・』

～事情説明中～

「「と言うわけだ（なのよ）」」
2人同時に言い終わる。
「へ～、な～るほど・・・」
なにか変なことを言い出しそうな雰囲気だったので
「ところでなんでお前は言えに来たんだ？」
美長はなぜか真っ赤になり固まっているのでご本人に聞いてみた。
「実はね、私の両親が海外旅行に行っててそこの飛行機がなにかのトラブルを起こしたらしくて・・」
「それはまた大変だな・・・」
「で、同時にストライキとかなんか起きちゃって年単位で帰ってこれないの」
・・・ほんとに大変なことになってるな。
「うわ～・・・両親は無事なのか？」
「うん。まぁ治安の良い国だし、ホテルも無料になるからって向こうに泊まるみたい」
ずいぶんとのん気な親だな・・・。まぁ無事なら安心だ。
「そのことを美長に言ったら『私の家に来なよ！』って言うから・・・」
けっきょく自分のせいじゃねーかよ。美長。
「で、美長。けっきょくどうすんだよ」
「どうってなによ・・・」
こいつは話を聞いてなかったのか？まぁいいや。
「実理1人を家に帰すわけにもいかないしな・・・」
最近はなにかと物騒だ。しかも今はなんやかんやで12時を回って

いる。女子を1人で帰すわけにもいかない。
「私のことは気にせず。2人の邪魔なんてしないからさ」
・・・またこいつはそういうことを言うし
「そ、そんな！実理！私の家に泊まりなよ！」←俺の家です。
「私にはそんなことできないよ！」
なんか実理がのってきたし追い返して皆にチクられてもあれなので・・・
「おい、実理。泊まっていけ」
仕方がなくそう言ってやった。なんとなくイヤな予感はしていたが・・・
「え！いいの？ありがとう勇人！」
・・・なんかこいつ『計画通り』みたいな顔したぞ？
「じゃお言葉に甘えて～」
ここ、杉下家はもともと両親と俺の3人で暮らすつもりだったのでそれなりの広さはある。しかし3人ぐらしになるとはな・・・。

『3人で・・・』（後書き）

今回も読んでくれた人ありがとうございます！
進むのが遅くてすいません。
学生なので土、日しかたぶん更新ができないと思いますが
お願いします。
気軽に指摘、感想をお願いします。

続・苦悩の日々

杉下勇人の今までの一日は、こうだった。学校のある日は自分で起きれない美長を起こし、二人ぶんの朝食を作り登校。休日はテキトーだ。しかし・・・
なぜ一人増えたらキッチンが吹き飛んでるんだよ・・・。
「・・・。」
「えへへ・・・。失敗」
「えへへ、じゃねーよ！」
理由を聞くとキッチンで理科の実験・・・もとい料理をしていたらしいんだが。
（どう見ても理科の実験じゃないか・・・）

と言うわけで今週の休日二日目はいきなりキッチン爆破というありえん現象からはじまった。なので昼、夜はファミレス、朝はパンになった・・・。
「で、お前らは何を作ろうとしてたんだ？」
「「ベーコンエッグ」」
「どう考えたらあれでそうなる？」
卵とベーコンはあった。しかし理科の実験でしか見たことないような薬品が並んでたような？
「はぁ・・・。これから不安だ・・・」
ファミレスとか以外は何するかって？たぶん女子二人にいろいろ連れ回されるだろうよ。ハハハ・・・。
「そろそろ帰ろっか」
と、実理が言ったので俺たちもうなづき会計を済ませ（俺が全部払う）キッチンが爆破された家へ帰る。

続・苦悩の日々（後書き）

更新が遅くなりすいません。
またも自己都合により短くなっております。
しかし！これからの波乱の展開へのステップだと思い（？）お許しください。
では感想、ご指摘、お待ちしています。

続々・苦悩の日々

「あ、私、買いたいものがあったんだ！」
実理が言ったので美長が
「じゃ、私も行く～」
と言うので俺も行くのか・・・と思い振り返るが
「あれ？勇人も来たいの？」
なんて言ってきた。できれば行きたくないんだが？ふと実理の顔を見ると・・・わ！絶対なんかたくらんでる！
「い、いや。俺は先に帰ってる」
「そぉ？別に来たかったら良いのよ？」
・・・こいつ。女じゃなかったらしばいてるぞ。まぁ二人を見送り俺は家へ向かう。そういや前は下着売場に連れてかれそうになったっけ？

俺は久しぶりに一人でゆっくりすごせた。あの乱暴娘×2が帰ってくるまで何しようか、と思っていたら寝てしまい起きたら夕方の六時三十分。貴重な時間を少し無駄にしたようだったがたまには良いか。
「たっだいま～！」
「おじゃま・・・ただいま！」
お前はおじゃましますで良いんだぞ。実理。
「もう！こんなとこでゴロゴロしないでよ！」
ガスッと俺をソファから蹴飛ばす美長。そしてそこに自分がそこに寝ころぶので余計にむかつく。
怒らないのかって？そりゃ・・・。怒りたいよ？怒っても仕返しがこなければ・・・。な。

続々・苦悩の日々（後書き）

本日2度目ですが短いです。
いつもすいません・・・

ボーイ

俺の家では代々、女の立ち位置が・・・。たとえるならスライムと魔王くらい？違う。そのことに悲しんでいると

「何？その顔？」

「性格のしょぼさが顔に出た？」

がまん、がまん・・・と思いつつ、夕食はまたファミレスに向かう。

～ファミレス内～

「そういや街ですごいかっこいい人いたよね」

「うん！かっこいいって言うか、『美少年』って感じの子」

「はぁ？美少年？」

美少年とかっこいいはちがうのか？

「うんうん。ぱっと見は女の子だっよね！」

「でも、どっかで会ったような・・・？」

「なんだ？会ったことあんのか？」

俺は美長にたずねる。

「ん～。確か勇人も居たような・・・？」

「そりゃそうだ。ほとんど一日中いっしょだからな」

「でも、わかんないなら考えても仕方がないんじゃない？」

仕方がないんじゃない？じゃねーよ。美長なりに必死で思い出そうと・・・

「そうだね！もう帰ろっか！」

「・・・。」

帰り道も二人の女っぽいその美少年の話を聞きながら帰る。

「美長！今日いっしょにお風呂入っていい？」

ボーイ（後書き）

終わり方がなんとも微妙な・・・w
こういう展開が苦手な人はすいません。
次は少々こういうのが入ると思われますが一時的なのでご安心ください！
ではご指摘、ご感想お願いします！

学校で・・・

「え？いいけど・・・。なんでよ」
「私には美長の成長を見なければならないのです！」
「ちょっ！どこ見て言ってんの！？」

・・・お2人さん。せめてそういうのは俺のいないところでお願いします。
「勇人さん？のぞきはいけないよ？」
「のぞかねーよ・・・」
正直、こいつのこういうのは慣れてしまった。いけないことなのかはわからん。
「え～。だって興味があるんでしょ？」
「はい？何に？」
「美長の体に」
言っておくがありません。
「まぁ、とにかく俺にはそういう興味は無いし、別に見たって何の得にも・・・ぐは！」
「何？得があったら見るわけ？ん？なんか言いなさいよ」
腹部にめりこんだ美長の拳。次は・・・首絞め！？死ぬって！
「何黙ってんの？言いたいこと、あるんじゃない？」
「・・・！・・・！？」
「美長。首」
「あ・・・」パッ
「ぐぇ！」ドサ
と、まぁ美長の恐ろしさはこんなもんだ。身長は小さいし、筋力自体も女子の平均なんだがスピードと技に長けている。その後は特に何も無く明日の学校へ備えて早めに寝た。

～翌日～

さぁ、月曜日。気持ちを入れ替えって無理だよな。まだ俺の体は完治していないし・・・。
美長たちは昨夜に引き続きその『美少年』の話をしていた。あきないものなんだろうか？

いつも早起きな実理がいるおかげで（せいで）早く学校に着いた。
自分の席に荷物を下ろすと・・・
「あ！あの美少年だ！」
「え？あ！ホントだ！」
美長と実理が言い出した。見たことあるって・・・同じ学校かよ。
「ほら勇人も見て！」
「言った通りでしょ？」
言われて見ると・・・確かに美少年だが・・・。あれは
「・・・朝日」
「！？は、はい！？」
その美少年は知り合いっていうかクラスメイトの横川朝日（よこかわあさひ）。あまり活発では無いが一応、俺の友達の中で数少ない常識人だ。
「ってなんだ。杉下君か～。今日は早いね。いつもギリギリなのに」
「ま、まぁな」
朝から本を読んでいたのかその本を手にニコッと笑顔を見せる。同姓とわかっているが少しドキッとしてしまう。
「あれ？勇人。この人と知り合いなの？」
「なんで言わないのよ！」
「言わないも何も同じクラスだろ」
「「え！？」」
・・・バカかこいつら。まぁ目立たないしな。それに・・・
「お前らよりおとなしいでででで！痛いんだけど！？」

「どうしたの？いきなりさけんで？」
「うるさいじゃない」
こ、こいつら。朝日に見えないように俺の足を踏み抜いてきた。
「そ、そろそろ皆が来る頃だよ～？」
何かに気付いたのだろうか、朝日は席に戻るようにうながす。
「そうね。じゃぁまた。え～と・・・」
「朝日です」
「そう！朝日君！」
美長。名前くらい覚えてやれよ。

学校で・・・（後書き）

さて。新キャラ登場です。しばらくはこの朝日君の話になると思います。
次の予定では少しづつ勇人たちのクラスメイトと学校をあきらかにしていこうと思います。
では、ご指摘、ご感想、お待ちしております。

クラスメイト

さて、ＨＲ(ホームルーム)が終わり１限目は体育。体育でやったー！なんて言ってられるのは小学生までだ。
なぜこの寒い中半そで、半ズボンで外に出なくちゃならん。とりあえず体育の筋肉教師こと山岡真斗(やまおかまさと)先生ににらまれないうちに走っておくか・・・。

山岡先生がきてさっそくこんなことを言い出した。
「え～。まずある事件からだ。おい、問題児トライアングル（山岡先命名）前へ出ろ」
すると２人の男子生徒が立ち上がり前へ出た。
１人は身長１８５ｃｍ近くある佐藤光矢(さとうこうや)。問題児トライアングルの中でも一番の問題児だ。
次は男子にしては小柄な岡田義明(おかだよしあき)。機械の操りに長けている。・・・
まぁ下心が丸見えだが。そして・・・
「おい、何している。早く出ろ。杉下」
「はいはい・・・」
トライアングルのリーダーこと俺。だが三人の中ではダントツに点数、成績は良い。（ていうか２人がダントツに悪い）なぜリーダーになったかというと・・・。たぶん入学式のことを覚えられてるからだろう。
「さて。本題だ。今日女子更衣室からこんなものが見つかった」
と言って山岡先生がポケットから出したのは黒い小さな物だった。
「これは・・・？」
「どうも小型カメラらしい」
女子更衣室に小型カメラって・・・。
「それっていけないんじゃ・・・」

素直に俺はそう言った。ちなみにこれは俺の物ではもちろん無い。
「あぁ、杉下の言うとおりだ。リーダーのことはきちんと聞かなくてはな。なぁ、岡田」
「！？」
本人はバレた！？的な顔をしているが俺は小型のカメラと言われた瞬間わかったぞ。こいつはそろそろ警察に行ったほうがいいと思う。公共の福祉として。
「さらに女子更衣室の床に小さな穴が空けられていた」
山岡先生が写真を見せる。そこには更衣室の隅に小さな穴が空いていた。どうやら更衣室の外から掘られたものらしい。
「・・・これは？」
一応聞くと
「うむ。バカな誰かだろうな。なぁ佐藤」
本人はバレた！？（以下略）
「で、この2人はどうする？リーダー？」
俺はめんどくさいので・・・
「あ～、煮るなり焼くなり好きにどうぞ」
「うん、それは助かる」
「てめ！裏切り者！」
と佐藤。
「・・・ひどい」
と岡田。佐藤、岡田。俺はお前らを裏切ってないぞ。元から仲間じゃ無いしな。
「お前らはこっちだ」
「「・・・」」
2人はだまって生徒指導室へと連行された。普通は職員室なのだが、2人はこれが2度や3度目ではない。
「はぁ・・・。」
深くため息をつく。というか俺は前に出される理由はあったのだろうか？

「いつも大変だねぇ・・・・」
「おぅ朝日。全くだ・・・・」
とにかく体育は自習。体育の自習なのでまぁ休み時間のようなものだ。

クラスメイト（後書き）

続々と新キャラが出てきましたね。
実のところ、問題児トライアングルは実在しましたｗｗ
というか僕だったんですけどねｗ
もちろんのぞきなどはしていないのであしからず。
では次回は勇人たちが通う大東高校についてのお話です。

大東高校

アホ２人が生徒指導室に連れて行かれている。ここでこの大東高校を説明しよう。
この学校では俺が知っているだけでもすでに２人歴史的有名人の子孫を入学させている。そのため外国人も、少なくはない。
しかし、俺のような特に有名人の子孫では無いやつもいる。しかしその人数は究めて少ない。さらに男子がなぜか少ない。１クラスだいたい男子は４～５人程度。それが４クラスなので・・・。
その代わりと言っちゃなんだが、女子が多い。１クラス３０人程。
しかし・・・いくら男子が少ないからって・・・。
（女子と体育を合同にするか・・・？）
今は冬だから良いが・・・。プールまでいっしょだったのは参った。って言っても１回しか入ってないけどな。それにプールの後は美長が切れやすくなるしな。なぜかは知らんが。

体育の授業はテキトーにすごした。そして後は平和に終わり４限目が終了。昼食になった。
「おい、勇人」
声をかけてきたのは佐藤だった。後ろには岡田もいる。
「なんだよ」
短く返すと
「俺さ、室内温水プールの無料券、当てたんだぜ！」
なんだこいつ・・・。プールでなんでこんなに大騒ぎするなよ。と思いながらチケットを見ると
「ふ～ん・・・。ってこれ！最近オープンしたばかりのとこじゃないか！」
前にＴＶでやってたがウォータースライダーやめちゃめちゃ深いプ

ールとかあるらしい。室内で温水だから冬でも大丈夫だしな。
「それだけじゃねーぞ？これは限定１００人に当たるプレミアムチケットだ！」
ちなみにプレミアムチケットとは中にある売店や有料のウォータースライダーも無料になるらしい。
「そりゃぁ・・・。すごいな。で、なんだ？自慢か？」
俺が嫌みっぽく言うと・・・
「俺はそんな小さいやつじゃねーぜ？」
じゃなんだ？ミジンコか？と思うがと思うが口には出さない。
「まぁ？そのプレミアムチケットは１枚で６人まで行けるんだぜ？」
「・・・それで？」
「あと三人、お前が決めろよ！」
佐藤にしてはなんかこっちに有利な気がするが。
「いいのか？」
「うんうん、いいって。そのかわり・・・」
「かわり？」
「美少女戦国武将を２人連れてくること！」
・・・そんなことだと思ったぜ。確かに同居はバレてないが美長、実理と俺が仲良いことは知っている。まぁその２人は言われなくても連れて行こうとは思ってたけどな。こんどはキッチンだけじゃ済まなさそうだ。となると・・・
「あと１人は？」
「別に？誰でもいいぜ？」
とだけ言って２人は去っていった。正直プールに誘うほど仲の良いやつはあまりいない。しかもプールだしなるべく女子はさけたいなぁと思っていると・・・
「・・・朝日」
「え！？な、なにかな？」
「プール・・・行く？」

大東高校（後書き）

少しは設定がわかっていただけたでしょうか？
次回はプールです。
いや・・・。まぁプールまで行けるかはわかりませんが・・・。
では次回もよろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3301z/

偉人パラダイス

2011年12月29日11時46分発行